



家康公と駿府(一)

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



長く続いた戦国時代の最後を飾った信長公、秀吉公、家康公の三人の個性については、「鳴かなくば殺してしまえ杜鵑(ホトトギス)」（信長公）、「鳴かなくば鳴かせてみしょう杜鵑」（秀吉公）、「鳴かなくば鳴くまで待とう杜鵑」（家康公）の歌が有名です。無論これは後の世の人が造った戯れ歌ですが、三人の性格の一端をよく表しているようです。

有力な大名家嫡男の信長公。足輕から昇りつめた秀吉公。小大名で三河統一を果たした祖父清康公が二四歳で、父広忠公が二五歳で夫々自分の家臣の手で殺され、御自分は三才で母と別れ、六歳で織田家の、八歳で今川家の人質となつて成長した家康公と、この三人の成長の背景も現代社会ではなかなか考えられないように多

様です。その三人が尾張から駿府迄と言う日本の極く一部で、ほぼ同じ時期に（信長公は家康公の八歳年上、秀吉公は五歳年上）歴史に登場して戦国時代に終止符を打ち、最後に家康公が世界に類の無い平和な時代を築いたことも、考えてみれば不思議なこと、なにか大きな力が働いていたようにも思われます。

当時の駿府は強力な今川家の統治のもとで長く平和が続き、戦乱から逃れた京都の知識人が数多く住んでいる大文化都市でした。この平和な大都市で家康公は八歳から十九歳までの十二年間を過ごします。今で言えば小学三年生から大学の一、二年生迄ですから、後の家康公には一番懐かしい所となり、晩年をこの地で過ごされることになったの

だろうと思います。公の立場は人質と言うよりも、将来の若き武将として今川義元の期待を担い、臨濟寺で雪齋師の教育を受けていたようで、臨濟寺には若き家康公が学んだ小さな机が残っています。

一方この時期は松平家の本拠である岡崎には今川家の城代が入り、松平家の家臣団はその配下として苦しい生活を強いられた時代でした。

この青年時代の駿府の生活の中で、家康公は今川家の姫（築山殿）を娶り長男の信康が誕生しました。家康公十七歳の時の子供です。当時としては当り前のことですが、公の一番末の子供は水戸徳川家の始祖となる頼房公で六四歳の時の誕生ですから四七歳の差があります。健康マニアでもあった家康公の底力を見る思いです。



「竹千代手習いの間」家康公が青年時代に学んだ臨濟寺の部屋を駿府城巽櫓内に復元展示